随　想

小さな喜び

田副敏郎

来る日も来る日も町の中でアクセクしているうちに、たまに所用で上京することがある。

以前は汽車ばかりであったが、その汽車に乗ることがひとつの喜びであった。それは寝台車の個室でしんみり孤独を味わうことができたからである。誰にも煩わされることなく、雑用から開放されてぼんやり車窓の景色を眺めながら思いにふけることも、本を読むことも、うたた寝をすることも、すべて気ままにできることが嬉しかった。一昼夜足らずの一人旅だけれども思いがけない所に心の憩いの場を見出して楽しんだものである。

飛行機で行けるようになってからはそれが出来なくなってしまって、時間は大いに短縮されたけれども、心の安らぎを求めることができなくて、いっそうせちがらくなったような気がする。そのうちに新空港ができると、上京するたびにまたひとつの小さな喜びを見出した。

それは保田窪のあたりから空港までの爽快なハイウェイを走ることである。人と車のゴミゴミした町を抜け出て、あの道路に出ると、まるで別世界に来たようにホッとする。赤や青の文化住宅も無くなり、豊かな緑におおわれた田園風景がことのほか美しい。手近かなところにまだこんなところが残っていたのかと思うと救われたような思いがする。もちろん阿蘇や天草あたりまで足を伸ばせば、いくらでももっとスケールの大きな大自然や、のどかな農村風景に接することはできるけれども、所用の道すがら僅かながらも和やかな気持ちにひたることができるのがありがたい。春は麦畑、秋は稲穂の実りの中を走って行くうちに、台地の草深い雑木林にさしかかる。自然のままに生い繁った林の中をゆるやかな勾配が続く。たとえ短い時間であってもさっぱりと心が洗われるひと時である。

帰り道は更にその感が深い。窒息するように息苦しい東京での生活を二、三日も続けて神経を消耗しきって帰ってくると、あの静かな雑木林をくぐり抜けて大津の町を遙かに望む青々とした平野がこと更に楽しく、ああわがふるさとに帰って来たという実感がしみじみと湧いてくる。都心から羽田までの目まぐるしい高速道路と比べて実に天と地のひらきがある。ただひとつ残念なことはあの美しい沿道のところどころに立っている馬鹿でかい看板である。広告のつもりで立てたのだろうがあれでは目障りで、かえって逆効果ではなかろうか。県の条例ですでに禁止されているそうだから、これ以上立つこともないだろうし、期限がくればいずれ姿を消してしまうだろう。それにしても、全く油断もスキもならない自然破壊の先兵がここにも憶面もなく現われている。

GNP世界第二位を誇りながら物質文明に溺れて右も左も公害を叫んでのたうちまわっているのがいまの日本人の姿であるとしたら、もう一度この頃よく使われる原点に還って自然の中に溶け込み、人間の心をとり戻すべきであろう。

（会社社長）

漫画雑感

伊藤たかし

「あたたちが一番よかばい、漫画ブームだけん」。よく言われることである。ところが事実は違っている。劇画ブームであって、本当の漫画ブームではない。雑誌の大半は劇画である。

漫画は風刺とエスプリがなければならない。一般の漫画観はそこを混同しているように思う。

ここでは本当の漫画について述べたい。

現在の日本の漫画は、売らんかなの雑誌商法のため、描く者、見る者も、何か見失っているのじゃないだろうか。テレビも漫画もドタバタが多いが、バナナの皮で転んで、それを笑うたぐいで、笑いとしては幼稚で下等な笑いである。日本人は昔から、お上から押えられ、笑うと無礼、失礼、また下品だとする風潮があった。だから、よほどオーバーなドタバタでないと笑わないのではなかろうか。

押えた演技のチャップリン、これこそ本当の笑いで、私たちも見習うべきと思う。そして、知性のある高級な笑いを生みだしたい。

私が漫画を描くとき、思うことはまず描こうとするものに疑いを持つこと。例えば一国の閣僚の収入が、その辺の中小企業の社長と同じ程度の発表。それを「ああ、そうか」と認めてしまわない。それはおかしい、そんなバカな……と、疑ってみる。そこにアイデアが生れる。1＋1は2になるとは限らないのである。なるべく当り前のことは描かない。

画技がどんなにうまく、人の描き方に漫画を取り入れていても、それだけでは単なる漫画的な絵であって見る人に訴える風刺やエスプリはない。

漫画の風刺にしても、昔からの政治風刺はもちろんだが、そんな視野からでなく、地球を見るなど、つきつめると人間を描く時代である。日本人でなく、人間が対象である。

そこに、国際性が求められてくるのである。言葉、題などよくなくても世界の人にも笑ってもらえる漫画である。

話は大きいようだが、事実、現在の漫画の方向であり中央、地方を問わず、大部分の漫画家の心にあるものと思っている。

そのためには、描く者はもちろん言うまでもなく、見る眼も本当の面白味、エスプリを知って高級な笑いを知ってもらいたいと思う。漫画は社会を明るくするものなど、大げさなものではないが、人間の知能のほんのデザートたることを私たちも努力していきたい。

（漫画家）

M老人のこと

福原満守子

二月にしては暖かな夕暮れ、台所の私に、「火事だって」と事もなげに娘から声をかけられ、エプロンで手を拭きながら通りまで走り出ると、M老人の住まいの辺りが黒煙の中に火柱をあげて燃えていた。独り住まいのM老人は逃げ出せただろうか、いやあの不自由な体では…と自問自答しつつ台所へ引き返したもののいやな胸騒ぎがして庖丁を持った手は無意味にまな板をコトコトたたいていた。

—やはり焼死であった—

老人と私には少しばかりのかかわり合いがあった。もう三年も前のこと、PTAの連絡のために、老人の家の近くにある娘のクラスメートN君の家に行く途中突然、全く突然に、私は激しくほえる三匹の野犬に囲まれ、恐怖の声をあげ立ちすくんだ。無防備・無抵抗の私の大腿部にその内の一匹が咬みついた。とっさに拾う石ころも見当らない、道にしゃがみ込もうとすると、三匹の犬は悠然と姿を草むらに消したのである。恐れおののく気持ちと傷の痛みとの複雑な交錯の中にN君の家に連絡をすませ、医者のもとへ走った。後日、N君のお母さんから、老人が数匹の犬を放し飼いにしていて、近所の人達は石や棒ぎれを持って自衛していたことや、署名を添えて、保健所に然るべき処置を陳情したこと、また私が三人目の被害者であることなどをうかがった。何としても憤りに似た感情を抑えられないまま、私は老人を訪ねてみた。

「犬をどう猛にするのは近所の人達ですよ、特に子供が悪い、始終犬さえ見れば石や棒で痛めつける、最初はみんなおとなしい犬だったが……しかし、今の私を守り支えてくれるのはこれたちだけです。」と、寂しそうな口調で、言葉も途切れがちに愛犬?の弁護に精いっぱいの面持であった。私の憤りの心も言葉も、たちどころにひるんでしまっていた。

その後、近所のスーパーマーケットに通う老人にしばしば出会った。旧式の自転車を歩行の支えとしての往復、店内では、つかまれる所にはすべてつかまってヨチヨチ歩きだった。マーケットの人や買物中の奥さん達が、M老人を暖かく手助けしてる光景を目にして、私は救われるような気持になった。マーケットの奥さんの話では、この老人は何度か老人ホームに入られたが、そのつどそこを脱出して帰って来なさるとか。実の娘さんが熊本市内に住んでおられるそうだった。火事の日も不自由な老軀に鞭打って夕餉の支度中の失火で、煉獄の中に七〇余年の生涯を終られた。

私は言い知れぬ寂漠を感じ、平穏であるべき、社会への使命を果したあとの老後に、福祉の問題は、現在前進しているものの、その歯車にさえ嚙み合わない何ものかが禍いを引き起こすこともあろう。老後の精神生活面の設計を折に触れ熟慮することも、あながち、退嬰的なことでもないように思う今日この頃である。

（主婦）

お知らせ

次号から随想欄をみなさんの〝ひろば〟として開放します。随想、県政への提言、ひとことなど何でも結構です。字数は四百字詰原稿用紙四枚以内。採用分には薄謝を贈呈します。ふるってご応募下さい。